

# 佐世保地区からの2強を撃破して日本冷熱工業が4連覇

## 第14回県下準硬式野球選手権大会

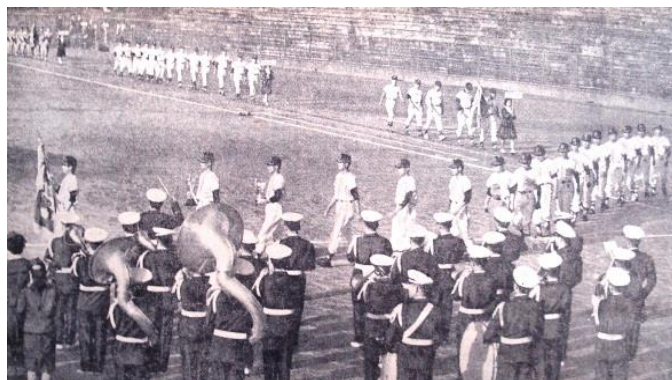
会期：昭和39年11月2日(日)～3日(祝)

会場：長崎市宮大橋球場

日本冷熱工業(推薦)	3	6	4	2	0	9	三菱長崎造船所(長崎)
親和銀行(佐世保)	1						古賀建設(諫早北高)
端島炭鉱(西彼)	3						大村アポロ(大村東彼)
第一養魚クラブ(長崎)	11						九州電工佐世保(佐世保)

前年より大会の参加枠が選抜され、前年度優勝チームをはじめレベルの高い5地区の代表8チームが参加した、第14回県下準硬式野球選手権大会の第1日は、午前8時40分の県警察本部および長崎バス両音楽隊の吹奏する行進曲にのっての入場行進から始まった。九州経営学園の女生徒の棒持する国旗、大会旗、について三年連続優勝の日本冷熱工業ナイン。ついで前年度準優勝の大村アポロ(澱粉クラブが改称)、佐世保地区から親和銀行、九州電気工事、西彼代表は端島炭鉱、諫早・北高地区からは初出場の古賀建設、地元長崎地区代表は初出場の第一養魚クラブと11年ぶりの三菱長崎造船所の8チーム選手団が歩を進めた。

(昭和39年11月3日付けの長崎新聞より記事と写真は抜粋)



## 6回、集中打で3点 日冷工が親銀を降ろす

【一回戦】 振球犠盗併残失

親和銀行	000 010 000	1	1	0	1	1	1	1	1	1
日本冷熱工業	000 003 00X	3	2	1	1	1	0	7	0	

【三】浜辺 【二】每熊、山口 1時間38分

【親銀】打安点

⑦飯田	4 0 0
⑥田中	4 0 0
⑧渡辺	3 0 0
①山口	3 1 0
⑤曾木	2 0 0
④相良	3 0 0
⑨永井	3 2 1
②金氏弟	2 0 0
H田淵	1 0 0
2塚原	0 0 0
③西田	2 0 0
H黒岩	1 0 0
28 3 1	

【評】日冷工は前半モタモタした試合ぶりで1点の先行を許したが、六回に鮮やかな集中打で逆転した。この回一死後に川内、的野、浜辺の3連続短長打で2点。青木も三遊間を突破して3点目を挙げた。親銀の山口は内角シュート、外角カーブをコーナーいっぱい決めて日冷工打線をかかわしていたが、この回は際どいところを決まらず、真ん中に好球を集めたところを狙い打たれた。リードを奪った日冷工は3人の投手を小刻みにリレーして逃げ切った。

親和銀行は本大会初出場。佐世保地区予選ではトップからラストまでムラなく打ちまくって好調の波に乗ったが、この試合では五回に二塁打の山口を永井が三塁線を抜いて1点を返したのみで、チャンスがこの回だけでは勝ち目は薄かった。

日冷工は本大会にはことのほか意欲を燃やすチーム。今季はパツとした戦績は残していないが、県体予選と猛練習で調子を整えてきており、仕事の関係で試合数は少なかったが県体予選でゲームのカンを取り戻して本大会に臨んだ。

【日冷工】打安点

⑧每熊	4 3 0
⑦梅井	2 0 0
②酒田	4 0 0
③川内	4 1 0
⑨1的野	4 1 0
④浜辺	4 1 2
⑤青木	3 1 1
6宮崎	1 0 0
⑥5宮原	3 0 0
①大塚	1 0 0
1西村	2 1 0
19浜崎	0 0 0
32 8 3	

## 不調の尾崎 狙い打ち

【一回戦】 (7回コールド) 振球犠盗併残失

第一養魚クラブ	214 101 2	11	3	5	0	3	0	9	1
端島炭鉱	200 100 0	3	3	2	2	0	1	7	2

【三】比地、野口 【二】青田2、吉原(養)、吉原(端) 1時間44分

【評】第一養魚は初回到2走者を置いて比地の右越え三塁打で2点を先制すると三回途中までに尾崎に7安打を浴びせ6点を奪ってKO。代わった吉原にも青田が二塁打で追い討ち、四回も比地のタイムリーで加点した。

端島の尾崎は球にスピードがない上に高めに球が浮き養魚打線に狙い打たれ、吉原も単調で勢いに乗った養魚打線を押え切れなかった。養魚の浦上投手も伸びが無くシュートの切れもいま一步不足で決してよい出来ではなかった。端島はこの浦上から初回到内野陣の守備の拙さに恵まれて2点と、四回は代打の森と吉原の長短打で1点を返したが焼け石に水だった。

第一養魚クは昨年に長崎県で開催の西日本準硬式大会に、日冷工と共に参加しベスト8。また国体の県代表になったが九州で敗退している。

【養魚】打安点

⑥島	5 2 1
④西岡	5 2 1
4宮崎	0 0 0
⑤寺尾	3 2 0
⑦杉山	0 0 0
8比地	4 3 3
③竹田	5 1 0
⑨野口	4 1 2
①浦上	3 0 0
1田中	0 0 0
②吉原	3 1 0
⑧7青田	4 3 2
36 15 9	

【端島】打安点

④高比良	3 1 0
⑤高比良	3 0 0
⑦1毛利	4 2 0
⑩38尾崎	4 0 1
②西山	1 0 1
⑨長崎	3 1 0
⑧高浜	1 0 0
3森	2 1 0
⑧小浜	1 0 0
17吉原	2 1 1
⑥矢野	2 0 0
26 6 3	

端島は現在無人島である。軍艦島とも呼ばれて世界遺産への登録運動を行なっている。三菱端島炭鉱は良質な強粘炭が採掘され、昭和35年には最高の5,267人の人口があり、人口密度は東京特別区の9倍以上の世界一だった。だが主要エネルギーが石炭から石油へと移行した『エネルギー革命』により

衰退し採掘も年々縮小され昭和49年1月15日に閉山した。端島炭鉱チームは29年の第4回大会が初出場。端島から約2.5km北にある同じ三菱系の高島炭業所と競り合って本大会に出場してきたが、6回目の出場となった第14回大会をもって『端島炭鉱』の参加は無くなった。

## 18安打の猛攻撃 三菱造船勝つ

【一回戦】 (7回コールド) 振球犠盗併残失 1時間48分

三菱長崎造船所	030 300 3	9	0	1	0	7	2	11	1
古賀建設	000 000 0	0	3	1	0	0	0	3	1

【二】洲崎、野原、山口

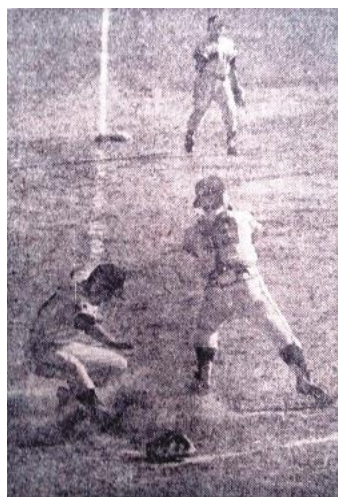
【三菱】打安点

⑧山田	5 3 1
③洲崎	3 3 1
3前田	2 1 0
④松山	4 2 1
⑦山口	4 2 3
⑥朝来野	4 1 1
②野中	4 1 0
⑨小崎	3 2 2
9畑田	1 0 0
⑤中村	4 0 0
1野原	4 3 0
<hr/>	
	38 18 9

【評】大会初出場の古賀建設の堀口投手が三菱造船の強打線にどのよ  
うなピッチングをするか興味がかけられた試合だったが堀口の不調か  
ら三菱の一方的なゲームとなった。堀口は  
前日までの具体で連投、その疲れからか直  
球にスピードが無くカーブで勝負しようとし  
たが切れが悪くコントロールも悪くは  
相手にはならない。

三菱はこの堀口の立ち上がりを襲い、初  
回は松山の中前打で本塁を突いた洲崎が中  
堅手の好返球に刺されたが、二回に四球と  
敵失後に小崎と洲崎のタイムリーで3点、  
四回には野原、山田の長短打で原口を降板  
させ、佐藤にも猛打を欲しいままにした。

これに対し古賀建設は完調とはいえない  
野原に散発の3安打のみで、チーム結成2  
年目の諫早地区予選で猛打爆発した打線も  
沈黙した。



【古賀】打安点

⑦本田	2 0 0
⑤熊崎	3 0 0
⑧川原	2 0 0
9野口	1 0 0
②田中	3 1 0
④1佐藤	3 0 0
①4堀口	2 1 0
H江口	1 0 0
③井上	2 1 0
⑨8山口	2 0 0
⑥中路	2 0 0
<hr/>	
	23 3 0

4回表三菱、山口の  
中飛で山田が生還し  
5点目

## 鮮やかに 井口が完封

【一回戦】 振球犠盗併残失

大村アポロ	000 000 000	0	4	0	0	1	1	6	2
九電工佐世保	100 020 01X	4	1	1	0	0	0	8	2

【三】野中 【二】松島 1時間36分

【評】九電工は大村の先発田島の球が高めにくるところをとらえて、  
松島が左越え二塁打し古川の中前打で還って素早く1点を先取。田島  
はこの後にカーブを主武器に好投していたが、五回二死一二塁に一ゴ  
ロをカバーに入った田島への悪送球で二走が還ってガックリしたとこ  
ろを柴山に左前適時打され、この回に2点を失った。大村アポロにと  
って致命的な失点だったが、この日の九電工・井口投手にはこの得点  
は余分ともいえる程の絶妙のピッチング。前半は速球とシュートで、  
後半はシュートでカウントをかせいでカーブで勝負。八回までアポロ  
打線を4安打散発に抑え、再終回到野中に三塁打されたが後続の二人  
を連続三振に打ち取ってシャットアウトした。

【大村】打安点

⑦田中	4 0 0
⑤64荒木	4 1 0
⑥5草野	4 0 0
③1野中	4 2 0
⑧3中野	4 0 0
④大島	3 2 0
6福田	1 0 0
①田島	2 0 0
8森	1 0 0
②笹田	3 0 0
⑨川上	3 0 0
<hr/>	
	33 5 0

【九電工】打安点

⑥松島	4 2 0
⑨古川	4 2 1
④柴山	4 2 1
②3佐々木	4 0 0
⑧2坂木	3 0 0
①井口	4 0 0
⑤荒木	4 1 1
③岩松	2 0 0
8村山	2 2 0
⑦広谷	4 1 0
<hr/>	
	35 10 3

大村アポロは前年までは『澱粉クラブ』で、31年の第6回  
大会に初出場時は『長崎澱粉』で優勝。その立役者は野中。  
初戦の住友潜龍戦では延長17回日没の継続試合を20回投じて  
失点1(自責点0)、続く西肥バスと長崎機械工具を1-0、  
2-0で連封し三試合38イニングス自責点0の快投を演じた。  
今回で9年連続9回目の出場となるがその間に『大村澱粉』  
『全澱粉』『田野澱粉』などとチーム名は変わったが、大村・  
東彼地区では無敵を誇っている。

九電工佐世保は牧山監督の好指導でメキメキ頭角を現わし  
全九州大会での優勝や、県民体育祭優勝3回の実績がある。  
3年前の36年は天皇賜杯全日本大会にも出場し、県下ではA  
クラスのチーム。本大会は4年ぶり二度目の出場で、前回は  
五島(九電営業所)に苦杯を喫しており今度こそはと張り切っ  
ている。エースの井口は島原高時代から好投手といわれてい  
たが九電工で十年近く投げているベテランで円熟期にある。

大会最終日のベスト4には、長崎勢3チームと九電工佐世保が勝ち残った。準決勝第1試合の長崎同士の一戦は延長10回の末、日冷工が敵失に恵まれて4点を挙げ第一養魚クラブを振り切った。第2試合は九電工の井口投手が三菱造船所の強打線に二塁を踏ませぬ快

投で二度目の出場で初の決勝戦に進出。決勝戦では日冷工が見事な試合運びを見せて同点の七回に勝ち越し点を挙げて4-2で逃げ切り大会4連覇を達成した。

(昭和39年11月4日付けの長崎新聞より記事と写真は抜粋)

## 延長10回敢闘むなし 第一養魚ク 冷や汗かいた日冷工

【準決勝】	(延長10回)	振球犠盗併残失								
日本冷熱工業	020 000 000 4	6	3	2	1	0	2	5	1	
第一養魚クラブ	100 010 000 0	2	1	9	5	2	1	12	5	

【三】的野【二】川内 2時間23分

【日冷工】	打安点	【養魚】	打安点
⑧ 毎熊	5 1 0	⑥ 島	3 1 0
④ 浜辺	5 2 0	④ 西岡	3 1 0
⑨ 西村	4 0 0	⑧9 笹田	3 2 1
③ 川内	5 2 2	⑨ 浦上	0 0 0
② 酒田	5 0 0	8 比地	3 0 0
⑥1 的野	3 1 1	⑤ 寺尾	4 0 1
⑤ 青木	4 0 0	③ 竹田	4 0 0
① 森	1 0 0	② 吉原	2 0 0
1 大塚	1 0 0	H 野口	1 1 0
H 浜崎	1 0 0	R 宮崎	0 0 0
6 宮原	0 0 0	① 田中	2 0 0
⑦ 梅井	4 1 0	1 大川	2 1 0
	38 7 3	⑦ 青田	3 0 0
		H 杉山	1 0 0
			31 6 2

【評】延長10回、日冷工が4点を挙げて第一養魚クを破ったが、養魚の自滅といってよい試合だった。

この回、先頭青木の左飛を落球したのがケチのつき始め。宮原のバントを一塁悪送球し、梅井はスリーバント失敗で一死となったが、毎熊の投手強襲内野安打で一死満塁のピンチ。浜辺の一ゴロで青木は本塁封殺かと思われたが、捕手がホームベースを踏みそこなう大ミスで勝ち越し点を与えた。しかも二死後に川内の左前打を再び野手が逸し走者を一掃され、とどめを刺された。

肝心な時にボロが出たが、特に捕手のミスは大きかった。与えなくてよかった点だけに、六回田中をリリースして好投を続けていた大川にとっては気の毒だった。

それまでは養魚が押し気味。立ち上がりから一死満塁のチャンスをつかみ寺尾の左犠飛で1点を先取。二回に田中が打たれて許したリードも五回に笹田のタイムリーで追いつき、追加点は挙げられなかったが再三得点圏に走者を進め、日冷工も防戦一方だった。

日冷工は二回に川内と的野が長打力を見せ、猛打線復活かとみられたが、この後に田中のカーブに五回まで三人ずつに片付けられるあたり、まだ本調子でなく、勝ったとはいえヒヤ汗ものだった。

## 淡々たる投手戦 九電工佐世保 2点を守りきる

【一回戦】	1時間18分	振球犠盗併残失								
三菱長崎造船所	000 000 000	0	9	1	0	0	1	1	1	
九州電工佐世保	020 000 00X	2	3	1	0	0	1	4	0	

【三】岩松

【三 菱】	打安点
⑧ 山田	4 0 0
③ 洲崎	3 0 0
④ 松山	3 0 0
⑦ 山口	3 0 0
⑥ 朝来野	3 1 0
② 野中	2 1 0
⑨ 小崎	1 0 0
9 畑田	1 0 0
9 前田	1 0 0
⑤ 中村	3 0 0
① 野原	3 0 0
	27 2 0

【評】九電工佐世保は二回二死から荒木と井口の連打でチャンスを迎え岩松が1-0後の真ん中高目の直球をきれいに引っ張って右翼左を抜く三塁打で先制の2点を叩き出した。この後は野原から追加点をあげ得なかったが、この試合の井口投手はこの2点だけで十分過ぎるほどの出来。外角に速球を決め前日あれほど打ちまくった三菱打線をほんろうして、2安打1四球を許したのみ。それも二人を盗塁死と併殺に退け二塁を踏ませぬ完璧なピッチングだった。

これに対し三菱造船所の野原も二回を除くと同じ回に連打を許さなかったが打線が反撃の足掛かりさえつかめぬ状態ではどうしようもなかった。淡々とした投手戦で1時間18分の早い試合だった。

11年ぶりに地区代表となった三菱長崎造船所は、予選で県庁に5-0、西部ガスを11-1、水道局を19-2と圧勝してきた。九州工業人野球で2連勝するなど、準硬式は打てるという自信がナインにはあったが、井口投手の快投の前には手も足も出せなかった。

【九電工】	打安点
⑥ 松島	3 1 0
⑨ 古川	4 0 0
④ 柴山	4 1 0
② 佐々木	3 0 0
⑧ 坂木	3 0 0
⑤ 荒木	3 2 0
① 井口	3 1 0
③ 岩松	3 1 2
⑦ 広谷	3 1 0
	29 7 2



# 日冷工が輝く4連覇

## 着実な試合はこび 5安打をみごと生かす

【決勝戦】 1時間36分 振球犠盗併残失

九州電工佐世保	100 010 000	2	4	2	2	1	0	7	3	【三】酒田
日本冷熱工業	100 100 11X	4	3	0	2	4	0	4	0	【二】酒田

【評】両チームががっぷり四つに組み優勝戦にふさわしい緊迫したゲームだった。九電工が日冷工の先発・森の立ち上がりを攻め、先頭の松島が安打で出ると古川が手堅く送り、柴山の内野安打で一三塁。佐々木の三ゴロの間に松島が本塁に突っ込んで先制点を挙げた。しかしその裏の日冷工も右前打で出た先頭の毎熊がいきなり二盗、浜辺の一ゴロで三進し酒田の右犠飛でタイとした。

四回の日冷工は二塁打の酒田が川内の中前打で還り(写真)1点のリードを奪った。このあたり井口は連投の疲れは覆えず、スピードが鈍っていたが、日冷工の森投手も練習不足は否めず。準決勝の第一養魚戦より落ち着いてはいたが直球が高めに浮いて良い出来ではなかった。

この森が五回に先頭の松島を歩かせバントで二進させると日冷工ベンチは大塚をリリーフに送った。この作戦は森が不安ただけに当を得たものだったが、二死から佐々木に左翼線に叩かれて、試合はふりだしに戻った。

だがそれも束の間。井口はカーブを多く使って日冷工打線をかかわそうとしたが、七回に青木の遊ゴロを失ったのが痛く、二盗を許した後に大塚から左適時打された。この1点だけならまだ勝敗の行方は分からなかったが、八回には酒田に右中間三塁打され川内の右犠飛で2点差を付けられて万事休した。

九電工先制攻撃も及ばず

閉会式で見事4連覇を達成した日本冷熱工業と、4年ぶり二回目の出場で初の準優勝に輝いた九州電工佐世保に、賞状や優勝旗、優勝杯、準優勝杯に副賞などが贈られ、次いで個人表彰があり、伊東大会会長代理(長崎新聞社業務局長)のあいさつ、国旗、大会旗などが降納された。このあと優勝した日冷工ナインを先頭に長崎バス音楽隊の吹奏する行進曲ののってダイヤモンドを

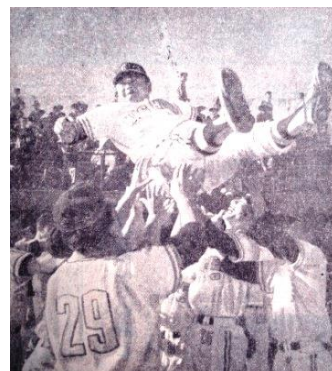


一巡。スタンドの応援団や観衆から両チームをたたえる拍手が沸き起こった。これに対して両軍ナインは長瀬ゴム提供のボールを投げ入れてこれに応えた。

【九電工】打安点	【日冷工】打安点
⑥松島 3 1 0	⑧毎熊 4 1 0
⑨古川 2 1 0	④浜辺 4 0 0
④柴山 4 2 0	②酒田 4 2 1
②③佐々木 4 2 2	③川内 3 1 2
⑧②坂木 4 0 0	⑨西村 4 0 0
⑤荒木 4 0 0	⑦的野 3 0 0
①井口 3 0 0	⑤青木 3 0 0
③岩松 3 1 0	①森 1 0 0
8村山 1 0 0	1大塚 2 1 1
⑦広谷 4 1 0	⑥宮原 3 0 0
32 8 2	31 5 4



最優秀選手賞=川内勝彦監督(日冷工)  
 首位打者賞=柴山三千年二塁手(九電工)  
 12打数5安打(,417)  
 敢闘賞=井口聖投手(九電工)  
 松島進遊撃手(九電工)  
 酒田正二捕手(日冷工)  
 美技賞=柴山三千年二塁手(九電工)  
 大塚征投手(日冷工)  
 勝利監督賞=川内勝彦(日冷工)



胴上げされる川内勝彦・日冷工監督

### 昭和39年の全国大会における長崎県代表チームの戦績

天皇賜杯第19回全日本軟式野球大会【51チーム】

(S39. 8. 9~:岡山県)

佐世保重工業【二】 1-0 本州製紙富士(静岡)

【三】 0-11 ヤシカ(長野)

第19回新潟国体(27チーム)には不出場

第15回西日本準硬式【26チーム】 11. 1~:滋賀県

松島炭鉦大島【一】 0-3 全高野口(和歌山)

第8回高松宮賜杯全日本大会 9. 6~:山口県

1部(10チーム)は九州から鹿児島が出場

2部(10チーム)は九州から熊本が出場